

# 商品・貨幣・資本

——マルクスの概念規定—— (1)

飯 田 繁

- 1 はじめに——経済学の研究対象はなにか——
- 2 労働生産物と商品
  - a 超歴史性と歴史性
  - b 使用価値と価値 ……〔以上(1)〕
  - c 価値と価値形態
  - d 物神性
- 3 商品と貨幣
  - a 貨幣の本質 (一般的等価形態)
  - b 貨幣の発生 (商品から貨幣へ)
  - c 貨幣の機能と運動——商品運動と貨幣運動との関係——
- 4 貨幣と資本
  - a 貨幣の資本への転化
  - b 資本運動のもとでの貨幣運動
- 5 おわりに

## 1 はじめに ——経済学の研究対象はなにか——

資本主義的経済体制を総合研究対象とするマルクス経済学の基本的な構造体系が描かれている『資本論』の展開は、「商品の分析」<sup>(1)</sup>からはじまる。商品とは何か、商品は経済社会のなかでどんな役割をはたしているのか、ということがだいいちに研究されている。「商品の分析」・商品にかんする研究からはじまる『資本論』の内容は、商品から貨幣へ、さらに貨幣から資本へと段階的・上積みに展開される。この展開過程をたどるさいにまず必要とされるもっとも

初歩的でしかも大事な注意事項は商品・貨幣・資本の概念規定——マルクス経済学に特有な商品・貨幣・資本それぞれの“形態規定”——である。

- (1) 「資本制生産様式が支配的におこなわれる諸社会の富はひとつの“尨大な商品集積”としてあらわれ、個々の商品はそうした富の原素形態としてあらわれる。だから、われわれの研究は商品の分析からはじまる」(Das Kapital, Bd. I., S. 39.)。

世間ではいともかんたんに商品を“もの”とよび、貨幣を(資本とともに)“かね”とっている。新聞・雑誌・著書や講演・研究会などで(専門の学会などでさえ)、「かねで“もの”を買う」とか、「かねを貸す・借りる」とか、いう言葉や表現がよく見かけられ、また聞かれる。“もの”とは商品のこと、また買ひばあいの“かね”とは貨幣のこと、貸す・借りるばあいの“かね”とは資本(正確には利子つき資本)のことである。まことにかんたんで通じやすいと思われている言葉であるが、もし商品・貨幣・資本のそれぞれの正確な概念規定を十分に心得たりえて使うのであるならばともかくも、さもなければ、これらの表現は商品・貨幣・資本にかんする正確な理解に人を近づかせないだろう。商品をたんに物量的な存在・“もの”と見なし、貨幣を金属量的な(紙製代用物量に転化する可能性をふくむ)存在・“かね”と考えたりえて、両者をただ数量的に対立させ、両者のたんなる数量関係から物価・インフレーションの現象をとらえようとする“貨幣数量説”<sup>(2)</sup>的な思考方法が商品・貨幣関係を正しく理解できなかったのは、まさにそのよい一例である。

- (2) 「……諸商品は価格なしで、また貨幣は価値なしで流通過程のなかにはいりこみ、そしてそのなかで商品雑炊の可除部分が金属山の可除部分と交換されるのだ、というバカバカしい仮説……」(a. a. O., Bd. I., S. 129.)。

たしかに外形的には商品は“もの”として、また貨幣・資本は“かね”としてあらわれる。商品はいろいろな用途・形状をもちながらも物質的存在物として、また貨幣・資本はいちように貴金属・“かね”(紙製などの有形・無形代用物)

のすがたで動いている。そこから、商品や貨幣・資本を外形的にだけ見てかたんに“もの”・“かね”扱いする向き（専門学者をふくめて）が生まれることにもなる。ところが、それでは残念ながら、商品・貨幣・資本の概念にそれぞれ特有な歴史的社会的性を理解することはできまいし、またそれらを理解することができないようでは、商品・貨幣・資本にかんする立ちいった経済学の真髓・諸関係を正しくつかむこともできまい。

ここで肝じんなことは、商品・貨幣・資本のもつそれぞれの歴史的・社会的特殊性の把握である。資本は貨幣を前提とし、貨幣は商品を基礎として成立する。そこでまず、商品のもつ歴史的・社会的特殊性についてすこしみよう。

商品は人類歴史の発展過程のなかである特殊な社会的条件が成立するときに始めてあらわれる。正確に言えば、その歴史的段階ではじめて労働生産物＝たんなる“もの”は、商品の“形態”をとる、商品として“形態規定”される。ある特殊な社会的条件というのは、① 自然発生的な社会的分業、② 土地をふくむ生産手段の私的所有、の2つである。これら2つの社会的条件は人類発展史上の一定段階にやっと登場してくるのであって、商品はこれらの社会的条件と運命をともにする。これらの2条件が成立するまえの“商品の前身”はたんなる“もの”であり、これらの2条件が消滅したら商品はまた元のたんなる“もの”にかえる。“もの”はあっても商品は存在しなかった社会が過去にはあったし、また“もの”はあっても商品がなくなる・商品の形態をとらない社会もいつか未来にはありえよう。商品はそのような、人類の永い歴史的過程に照してみれば、儚うたかたの存在・形態でしかない。これとは対照的に、“もの”は人類が存続するかぎり歴史をこえて永遠に存在するものなのに！ この、商品のもつ歴史的・社会的に限定された特殊な存在形態・形態規定・概念規定に科学的メスを入れたのがほかならぬマルクスであった。

商品は、“もの”としてあらわれるが、しかしたんなる“もの”ではなく、たんなる“もの”とは厳密に区別されなければならないといわれるわけの最重要ポイントは、商品のもつ価値的側面にある。商品の有用物としての使用価値の

側面ではまぎれもなく“もの”である。だから、商品をたんに“もの”としてみる立場は、けっきょく商品の使用価値的側面だけを見ているということになる。ところが、商品はもうひとつ、価値の側面をもっている。これこそがじつは、商品の歴史的・社会的側面にほかならない。商品の歴史的・社会的側面とは、それぞれの商品を生産するさいに必要なものとして投入され、それぞれの商品のなかに内包されることになる、歴史的に特殊な社会的条件のもとでの人間労働量の相互関係を意味する。それぞれの商品に内在するこうした歴史的・社会的側面、つまり人間労働関係は、商品のもつもうひとつの側面、使用価値的・物質的側面とはまったく異なるものであるが、それじたいとして存在することができず、この使用価値的・物質的側面のなかに宿る（存在する）ほかはない。たんなる“もの”としての労働生産物が歴史的に特殊な社会関係のもとで商品の形態に転化されると、それはもはやたんなる“もの”・たんなる使用価値ではなく、それから脱皮して“価値が宿る使用価値”・“使用価値であるとともに価値でもある”ところの、“使用価値と価値との対立的な統一物”になる、という点で商品は“たんなる使用価値としての”労働生産物から区別されなければならない。

このことについては、さらに項を改めて見ることにして、ここでは商品のもっとも大事な（理論的解明のうえで）価値的・社会的側面が使用価値的・物質的側面に宿り（物化され）、その本質をなす社会的な人間関係がもはや肉眼では（顕微鏡でも望遠鏡でも）見えなくなるところから、ひとは ややもすれば それの真相を見おとし、外面的にあらわれるそのの姿態にとらわれて、商品をたんなる“もの”扱いしがちになるわけについて、すこしふれておこう。このばあい、商品の歴史的・社会的側面がどのように表現されるか・あらわれるか・われわれの眼にうつるか、が“最重要ポイント”のなかの一焦点となる。結論的にひとことでは、商品の歴史的・社会的側面は、日常われわれが身近でみるように、すべて自然的・物質的な姿態をとる、すなわち物的に表現される・物象化される。商品は、一面では、人間にとって何らかの有用性（欲望を充足する

有形・無形の自然的・物質的要素）をもつという意味で使用価値であり，“もの”であるが、しかし同時にまた他面では、人間の労働によってつくられたものとして“労働の凝結物”，すなわち社会関係の物的表現＝価値でもある。商品は、だから、物質的・自然的存在としての使用価値的側面そのものには人間関係を内包する歴史的・社会的特殊性をぜんぜんもっていないが<sup>(3)</sup>、それと対立する価値的側面ではこれをもつところの、ひとつの矛盾する統一物である。ところが、商品の使用価値的側面だけでなく、価値的側面もまた“もの”としてあらわれる。というのは、商品のなかに投入された人間労働は“生きた”姿から消え失せた“死んだ”・“過去の”ものとしては、もはや眼にも手にも捉えられないものとなっている——感覚的に見えるもの、手にふれるものは、ただ物質としての商品の使用価値的側面・物的側面だけだ——からである。“死んだ”・“過去の”労働（労働の凝結物・結晶）は価値として使用価値・物質のなかに宿り、さらに交換される他の使用価値の姿態において価値形態としてあらわれる。そこで、ひととはかく商品をたんなる“もの”として見ることになるのだが、しかしこれに終始するかぎり、使用価値的側面においてならよいとしても、価値的側面においてはもっとも大事なものを、すなわち、物的表現をうけながらも、その奥に深くひそむところの内実（人間労働）の歴史的・社会的関係を、見うしなうことになる。

(3) 「鉄、紙などのようなすべての有用物は、質と量によって2重の観点から考察されるべきものである。こうしたすべての物は、多くの属性の一全体であり、したがっていろいろな方面に有用でありうる。物のこうしたいろいろな側面を、したがってまた物の多様な使用方法を発見することは歴史的行為である。有用物の量をはかる社会的尺度を見出すこともまたそうである」(a. a. O., Bd. I., S. 40. [傍点—原著者])。ここにいう「歴史的行為」・「社会的尺度」は、商品の歴史的・社会的特殊性に関連するものではない。労働生産物が商品の形態をとろうと取るまいと、使用価値としての労働生産物は歴史のたどる技術的發展や社会的慣習の流れなど（「歴史的行為」・「社会的尺度」）に相応して新しく生産・改良され・廃棄されるのだが、それでもなお、それらの「歴史的行為」や「社会的尺度」がどうであろうと、労働生産物がいなう使用価値そのものが歴史をこえて存在する自然的・物質的要因であることにも変わりはない。

さて、使用価値は自然的・物質的要素からなるといっても、人間労働のたすけをかりることなしにはたいていの場合あたえられない。使用価値の出現が人間労働を必要とするのは、なにも2つの社会的条件が成立するようになってからのことではない。歴史をこえた永遠のたんなる“もの”も労働生産物としてあらわれる。ともかくも、労働生産物が商品の形態をとろうと取るまいと、使用価値の形成には人間の労働が必要である。こうなると、商品の価値だけでなく、商品の使用価値もまた労働の産物だ（使用価値の形成には労働だけではなく、自然的属性も参入するのだが）ということになる。使用価値をつくる労働（具体的な有用労働）と、価値をつくる労働（抽象的な人間労働）との対立的統一のなかに、商品を生産する“労働の2重性”<sup>(4)</sup>を把握しただけでなく、さらに抽象的な人間労働が商品のなかに価値として物的に表現される・物象化されるということ（いわゆる“商品の物神性”<sup>(5)</sup>）を説いたところにマルクスの先達的な1功績があった。

(4) Vgl. a. a. O., Bd. I., SS. 45-51.

(5) Vgl. a. a. O., Bd. I., SS. 76-89.

このように、商品をたんなる“もの”から区別させる歴史的・社会的な特殊性が、皮肉にも同時にまた、労働（抽象的な人間労働）を価値として物象化し、人間関係・社会関係を自然・物質関係として、商品を“もの”としてあらわすことによって、商品の物的外観・外皮だけをみる人々には商品をまさにそういうものとしてのみ取扱わせる結果ともなったのだった。労働生産物を商品形態に転化させる2つの社会的条件のもとでは、人間関係が商品関係として、労働をめぐる人と人との社会関係が物と物との交換関係として、直接社会的にはなく間接社会的に相互交流するものとしてあらわれる。たとえば、ある人の“米をつくる社会的・平均的な5時間労働”と他の人の“布地を織る社会的・平均的な5時間労働”とは、米Xキログラムと布地Yメートルにそれぞれふくまれるあい等しい価値として相互交換される。このように、それぞれの商品の

生産のために投下され、凝結・潜在するある人の労働時間（労働量）と他の人の労働時間（労働量）との社会関係・人間労働関係は物質的外皮におおわれて見えなくなり、米Xキログラムと布地Yメートルという外形的な“もの”の数量関係として現象する。そこで、こうした外觀・現象形態にとらわれて商品をつたなる“もの”扱いは、その物的外皮におおわれた商品交換関係の本質としての、労働時間関係をになう価値関係、人と人との社会関係、歴史的・社会的特殊性を見のがすことにもつながらざる。

(6) 「いろいろな使用対象が**い**っぱんに商品となるのは、も**っ**ぱらそれらが**た**が**い**に独立して営まれる私的労働の生産物だ（このことは、① 自然発生的な社会的分業、② 生産手段の私的所有の“2つの社会的条件”が成立していることを意味する〔飯田注〕）からである。これらの私的労働の複合が社会的総労働を形成する。生産者たちは、かれらの労働生産物の交換によってはじめて社会的に接触するのだから、かれらの私的労働の特殊社会的な性格も、この交換の内部ではじめてあらわれる。……だから、かれらにはかれらの諸労働の社会的なつながりはあるが**ま**まに（als das was sie sind, つまり、外形・外皮のままに〔飯田注〕）**あ**ら**わ**れる。すなわち、生産者たちの労働じたいにおける人と人との直接社会的な関係としてあらわれるのではなく、むしろ人と人との物的関係として、また物と物との社会関係としてあらわれる」（a. a. O., Bd. I., S. 78.〔傍点—原著者〕）。

商品経済・貨幣経済・資本経済の研究においてまず第1にもとめられるのは、それぞれの概念規定に即応するところの研究対象がたんなる“もの”・“かね”としての外形的な物量・金属量（紙製代用物量など）ではなく、それらの物量の外皮におおわれて肉眼ではもはや見えなくなっているところの、深奥にひそむ特殊な歴史的・社会的関係であるという動かせない真実をあばき・知り・つかむということである。経済学の研究課題は、こうした経済学の研究対象をまず科学的に把握することからはじまり、経済学の研究対象の歴史的・論理的展開・関連を追究することにある。

## 2 労働生産物と商品

### a 超歴史性と歴史性

人類が日々その生命を保持し、文化・文明を開発・推進してゆくためには、たえず数知れない有用物質を必要とし、またそれらを消化しなければならぬ。それらの有用物質はほんらい天然・自然にあらわれたものではあるが、しかし多くのばあい天然・自然にあるがままのものではない。天然・自然の物質が人間によって分解・化合・合成・加工されて、すなわち自然の物質に人間の労働が加えられて、そのときどきの人間の欲望充足にもちいられる。自然の物質に加わる人間労働は、一面では文化・文明水準を向上させながら、他面では逆に文化・文明水準の向上によってますます複雑・多様化の程度を高められる。つまり、人間労働の複雑・多様化は、文化・文明向上の1原因であるとともに、文化・文明向上の1結果現象でもある。自然（物質）と人間（労働）との結びつきは、人間社会の文化・文明生活にとって不可欠のものであって、どんな体制の社会関係・社会制度のもとでも人間は人間労働の成果・産物（自然と人間労働との混成）なしには存立できない。

人間がたえずもとめる有用物質・使用対象（使用価値）は自然（物質）と労働との混成、労働の産物・労働生産物である。そこで、人類が生存するかぎり、いつの時代にも労働生産物がついてまわる。いいかえれば、使用価値である労働生産物は永遠に人類と共存するところの、社会体制の違いを超えた“非歴史的”・超歴史的（歴史的・特殊的社会関係によって制約されない）・自然的・物質的概念として存在する。使用価値としての労働生産物はその時代・時代の文化・文明水準の“歴史的産物”であるということは、自然に加えられる労働の複雑・多様性の程度をしめすだけのものであって、たとえば現代の“歴史的産物”（昔はなかったが今はあるという意味での）といわれるテレビやコンピューターもつまるところそれぞれ自然的・物質的構成要素の集大成にほかならない。労働



生産物は、つづいてのべるように、歴史的に特殊な社会関係のなかでは商品形態（商品という社会的・歴史的形態）をとり、そのそとでは商品形態をとらないのだが、労働生産物が商品形態をとろうと取るまいと、使用価値としては自然的・物質的視点でとらえられることになる。

労働生産物は社会的2条件、①自然発生的な社会的分業、②生産手段の私有が成立する歴史的に特殊な社会関係のもとではじめて商品という形態をとる。2つの社会的条件のどちらが欠けても、労働生産物はもはや商品ではなくなり、社会関係の歴史性・特殊性をこえた、すなわちどんな社会関係のもとでもみられる永遠な概念としての“たんなる労働生産物”にかえる。“商品としての労働生産物”とは何か、についていまごくかんたんに答えるとするならば、それは生産者じしんの用途に直接あてられるものではなく、他人の労働生産物との交換（合理的な納得ずくの行為）をとおして他人の用途に使われる労働生産物である、といえよう。だから、交換しないで生産者じしんの自家用にあてられる労働生産物、また使用前に手ばなすとしても、たとえば慈善・寄贈や強制徴収・強奪・詐取などをとおして他人の手にわたってゆく労働生産物は、生産者じしんにとっても、またその他人<sup>(1)</sup>にとっても商品ではない。それが労働生産物であることにはちがいないとしても。労働生産物は必ずしも商品ではないが、商品は必ず労働生産物でなければならぬ。このことについては、あとで商品の使用価値と価値との関係にふれるさいに再論しよう。

(1) 「自分の生産物で自分じしんの欲望をみたす人は、使用価値をつくるのではあるが、商品をつくるのではない。商品を生産するためには、人は使用価値をだけではなく、他人のための使用価値、すなわち社会的使用価値を生産するのではなければならない。（しかも、たんに他人のための、だけではない。中世の農民は、封建領主のために年貢穀物〔Zinskorn〕を、僧侶のために<sup>IIa</sup> 10税穀物〔Zehntkorn〕を生産した。しかし、この年貢穀物も10税穀物も、それらが他人のために生産されたことで商品になったのではない。生産物が商品となるためには、使用価値として用いられる他人の手に交換をとおして渡されるの<sup>IIa</sup> でなければならない。』（Das Kapital, Bd. I., S. 45. 「IIa 第4版への注。——わたくしはカッコ内の文句を書き入れる。そのわけは、この書き入れがないと、マルクスにあっては生産者以外の人によって消費され

る生産物はなんでも商品と見なされているかのような誤解が非常にしばしば生じたからである——F. E. [フリードリッヒ・エンゲルス]】。

労働生産物が交換をとおして他人の手にわたることによって商品の形態をとることができるために不可欠となる社会的条件が、上述の ① 自然発生的な社会的分業であり、② 生産手段の私有である。自然発生的な社会的分業によって、使用価値として生産される労働生産物は生産者の間でいろいろとそれぞれ相異なる。また土地をふくむ生産手段の私有によって結果的に労働生産物も私有されることになる。こうした労働生産物のちがいと私有とが交換を必要とし、交換を可能にする。労働生産物は交換されることによって商品となる。もっと正確に言えば、交換される(ための)労働生産物が商品である。労働生産物が相互交換されうるためには、労働生産物は ④ それぞれ使用価値としてあい異なるものでなければならないし、⑤ 生産者によって所有(私有)されなければならない。労働生産物の交換を必要とし、可能にするこれらの④・⑤は、うえにのべた社会的2条件、① 自然発生的な社会的分業、② 生産手段の私有によって結果的に生ずるのだから、労働生産物に商品形態を付与する基本的な社会的条件としてはこれらの①・②があげられることになる。これらの基本的な社会的2条件がそろって存立する社会関係は、人類生活史上いつの時代にもみられるというようなものではない。よくいわれるように、“社会関係はたえず変遷する”。これらの社会的2条件がそろって見られるのは、歴史的に限定された特殊な社会関係においてだけである。そこで、“労働生産物そのもの”は人類とともに存立する永遠の・超歴史的・自然的な概念であるが、“商品形態をとる労働生産物”・“商品としての労働生産物”・すなわち商品は社会関係の変遷とともに生滅する歴史的に限定された特殊社会的な概念である。① 自然発生的な社会的分業と、② 生産手段の私有とが成立する特殊な社会関係のもとでは、種類の労働生産物がそれぞれの生産者のもの(私有物)として合意的に交換されることになり、こうして労働生産物は商品となり、他人の使用価値となる、とい

うのが以上のかんたんなまとめである。このことをさらにいくつかの論点にわけてもうすこし考察しよう。

第1点、商品となる労働生産物は生産者の私有物であるということ。第2点、商品となる労働生産物は生産者じしんの使用価値となるのではなく、他人の使用価値となるということ。第3点、本源にさかのぼるが、商品となるものはもともと労働生産物であるということ、いいかえれば、労働生産物でないもの、労働によらず天然・自然にあるものは、どのように人間にとって大事なもの、有用なもの、絶大な使用価値であろうとも、ほんらい商品とはなりえないということ。このことは、つづいてあらわれる商品における使用価値と価値との“矛盾の統一”、“労働の2重性”問題ともふかくかかわるので、本源の問題ながら、総括の問題でもあり、さいごの第3点とする。そこで、第2点・第3点の内容は、次項以降の“使用価値と価値”・“価値と価値形態”・“物神性”の諸問題の叙述のなかに流す（とくに第2点・第3点としてかかげずに混ぜ合わせ・絡み合わせながら）ことにしよう。

本項では第1点についてだけ。生産手段が共有される（私有されない）ばあいには、その生産手段をつかっての労働の結実＝労働生産物もまた共有される。狭い共同社会のなかでの構成員の労働は類別分業的であろうと、集団協業的であろうと、もちいられる生産手段（土地をふくめての主軸的な労働用具）が社会構成員によって共有されているかぎり、できあがる労働生産物もまた社会共有のものとなる。<sup>(2)</sup>共有される労働生産物は構成員の各自が恣意的に処理することはゆるされない。一定の方式で分配されて構成員の手にわたり、やがてそれぞれ消費される。そこには分配はあっても、交換はない。<sup>(3)</sup>生産手段が共有される社会関係のもとでは労働生産物は交換されないのだが、そのわけは労働生産物が私有されないということにある。自然発生的な社会的分業がそこに成立して、<sup>(4)</sup>たとえ労働生産物の種類が労働力の提供者・生産者のあいだでそれぞれ違っていても。交換は共同社会のなかからではなく、ひとつの共同社会と他の共同社会との接点からはじまる、<sup>(5)</sup>といわれる。共同社会そうごの接点から

はじまる労働生産物の集団的交換がさらに共同社会の内部へ浸透して、個別的商品交換として一般的にひろく定着するためにはその内部で生産手段（あらゆる生産手段の源泉としての土地）の私有→労働生産物の私有が一般的に確立されるのでなければならない。土地、その他の生産手段が一般的・定着的に私有化される（共有されない）ようになれば、共同社会（Gemeinschaft）は消えて、代わりに相互独立の私的労働の利益社会（Gesellschaft）があらわれる。労働は、共同的な相互依存の直接的・透明な社会関係から脱皮して、相互独立の私的・間接的・物的・不透明な特殊社会関係に進展することになる。<sup>(6)</sup>くわしくは d 物神性で。

(2) 正確にはあてはまらないだろうが、ごく卑近な一例を。第2次大戦中、筆者が勤務していたある大学で校庭の一部がイモ畑に転化された。用地はもとより、農機具・イモの苗、その他あらゆる生産手段が大学によって負担・調達された。いうなれば、生産手段はすべて大学の所有、大学組織の公共財産（大学の経営者・所有権などの開き直った法的問題などはいま論外として）であった。しかし、労働力の提供者は教職員・学生一同で、労働力はこれら個人のものである。資本主義社会のなかではあるが、大学をひとつの共同社会とみるならば、教職員・学生はその構成員である。実ったイモは大学に所属するもの、構成員全体の共有物として分配された。当然のことながら、“この部分のイモは自分が植えた”という理由だけで、何の取りきめもなしに、各自がそれを“私有物として勝手に処理する”（交換の対象とする）ことは許されなかった。

(3) 共同社会で労働生産物が構成員に分配されたあとで、それらの分配物がさらに構成員のあいだで交換されることがあるとしても、その交換は分業・私有社会の必然的支柱要因としての交換とは本質的にちがうものである、ということを手紙でヒルファディングはひとつの譬え話で説明している。「……社会主義社会でも交換はおこなわれうる……。しかし、それは社会によって意思と意識でどうにか規定された分配のあとでの交換である。だから、この交換は、いわば社会的分配の私的修正、私的行為であって、主観的な気分や考慮に支配されるものであるが、しかし経済学的分析の対象ではない。この交換は、子供部屋でのロケットとフリッツとの間の玩具の交換とおなじような役割を理論経済学にたいして演ずるのであって、かれらの父親が玩具屋でおこなった購買とは根本的にちがう交換である」（R. Hilferding, *Das Finanzkapital*, Dietz Verlag Berlin 1955, S. 10. 林要訳『金融資本論』（改造社出版）22ページ）。“玩具屋での父親の購買”が分業・私有社会での客観的・不可欠の一

要因としての交換なのである。問題はまさにこの交換である。

- (4) 労働生産物の商品化は労働生産物が交換されることによっておこる。労働生産物が交換されるということは、うえにくりかえしのべたように、① 自然発生的な社会的分業と ② 生産手段の私有とが成立するという2つの条件によってはじめて必要となり、可能となる。2つの条件のうち、そのひとつを欠いても労働生産物は交換されえない。分業には2つのパターンが考えられる。ひとつは原始・古代時代から自然発生的に成立し、しだいに複雑に発展する社会的分業であり、いまひとつは高度に発展した商品生産社会のもとでの工場内分業である。ところで、“自然発生的な社会的分業と交換との関係”(a)は、“工場内分業と交換との関係”(b)とは根本的にちがう。(a)においては、社会的分業が交換（労働生産物の商品化）の存立条件であるが、(b)においては逆に交換が工場内分業の存立条件である。(a)のばあい、社会的分業が交換の存立条件だとはいっても、生産手段→労働生産物が私有されえない（共有される）社会関係のもとでは、自然発生的な社会的分業は交換の存立条件とはならない。だから、自然発生的な社会的分業は、交換存立の必要条件ではあるが、十分条件ではない、といえよう。自然発生的な社会的分業はあっても労働生産物が私有されない社会関係のもとで労働生産物が商品とならないのは、工場内分業のもとで労働生産物がおのおのの労働者の個別的な私有物として工場内で交換されないと類似している。しかし、この点を除いては、“自然発生的な社会的分業と交換との関係”は“工場内分業と交換との関係”とは根本的にちがう。工場内分業では労働者がその個別的な生産物を私有するわけではないのだから、労働者間での個別的な労働生産物交換はおこなわれないが、しかし工場内分業そのものはあくまでも商品生産・交換（しかも発達した商品生産・交換）をその存立条件としているのであって、商品生産・交換を前提とすることなしには工場内分業は存立できない。それとはまったくちがう、自然発生的な社会的分業は、労働生産物が私有されるばあいには、みずから商品生産・交換を存立させる前提条件となる。「いろいろな種類の使用価値あるいは商品体の総和には、おなじように属・種・科・亜種・変種にしたがっている」と多様な有用労働の総体、すなわち社会的分業があらわれる。社会的分業は商品生産の存立条件であって、逆に商品生産が社会的分業の存立条件なのではない。古代インドの共同体では、生産物は商品にならない（それらの生産物は私有されていないので—飯田注）のに、労働は社会的に分割されている。あるいは、もっと身近にある例をあげると、どこの工場でも労働は組織的に分割されているが、しかしこの分割は労働者が各自の個別的な生産物を交換することによって媒介されているのではない。自立的なたがいに独立している私的労働の生産物だけが商品として相対する」(Das Kapital, Bd. I., S. 46. [傍点—原著者])。

“社会的分業が交換（商品交換・商品生産）の存立条件であって、逆に交換が社会

的分業の存立条件なのではない”(交換はなくても、社会的分業はある)とマルクスが明確にのべているのは、アダム・スミスの“分業論”における逆論理にたいする批判を意識してのことではなかったろうか。アダム・スミスは周知のように『国富論』第1編冒頭に分業にかんする諸章(第1～3章)で、“交換は人間性の本来の原理にもとづくもので、こうした人間の本能的な交換こそが分業の存立条件である”ことを強調している。「……それ(分業)は……ある物を他の物と取引し、取換えし、交換するある人間本性の結果である」(A. Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, Volume 1., p. 15. [Humphrey Milford, Oxford University Press], 大内兵衛訳・『国富論』1, 38ページ〔岩波文庫〕, 竹内謙二訳・『国富論』上巻118ページ〔改造文庫〕)。「……もし取引し、取換えし、交換する性向が人間になかったならば、各人は自分が欲する生活必需品や便宜品をすべて自分でつくらなければならなかったことだろう」(op cit, p. 18. 大内訳 43ページ, 竹内訳 123ページ)。「……分業をひきおこすものは交換力である……」(op cit, p. 19. 大内訳45ページ, 竹内訳125ページ)。“交換はなくても社会的分業はある”とマルクスが説いているのにたいし、“交換がなければ社会的分業はない”とスミスはいう。そのさい、スミスは“商品交換を前提としない(交換がまだ発生していない)自然発生的な社会的分業”と“商品交換を前提とする発達した工場内分業”との本質的差異をまったく度外視している。

- (5) 「物品(Dinge)は、それ自体としては人間の外部にあるもので、したがってまた譲渡されるものである。この譲渡が相互的であるためには、人間は譲渡されるその物品の私的所有者として、またまさにこのことによって、たがいに独立の個人として黙ってあい対することを要するだけである。しかし、このような相互に隔絶した関係は、ひとつの自然発生的(naturwüchsig)な共同体の構成員にとっては存在しない。その共同体が家長的家族の形態をとってしようと、古代インドの共同体やインカ国家などの形態をとってしようと。商品交換は、共同体の端で、すなわち、共同体と他の共同体・その構成員との接触点ではじまる。しかし、物品はひとつび共同体の対外生活で商品になると、反作用的に共同体の内部生活でも商品となる」(Das Kapital, Bd. I., S. 93. [傍点一原著者])。
- (6) Vgl. a. a. O., Bd. I., S. 78.

## b 使用価値と価値

上述の2条件が成立する歴史的に特殊な(いつの時代にも見られるというようなものではないところの)社会関係のもとではじめて労働生産物——しかも交換をとおして他人の使用価値(使用対象)となる労働生産物——は商品となる。これがう

えの要約である。このような労働生産物が商品となるということをもういちどよく見なおそう。

労働生産物が商品となるということは、労働生産物でないものはほんらい商品にはならない、といいかえられる。労働（人間労働）をふくまない“たんなる天然・自然物”はほんらい商品にはならない、たとえそれらがどんなに人間にとって有用なものであろうとも。例えば、新鮮な空気や日光はもともと労働生産物ではないし、したがってうえの2条件が成立する歴史的に特殊な社会関係のもとでも商品にはならない。

人間にとって有用なものは、① 天然・自然にそなわり・あたえられるそのもの、② 天然・自然に労働を加えて人間が新たにつくりだしたもの、の2種類に大別されうる。経済学で直接の研究対象となるのは、そのうちの②である。労働生産物はたんに労働によってつく<sup>り</sup>だされたものであるというだけではなく、さらに労働によってつく<sup>り</sup>だされた有用物でなければならぬ。「物が無用ならば、そのなかに含まれている労働もまた無用であって労働としては見<sup>(1)</sup>ない」。①・②のちがいは、人間にとっての有用性の大小にはかかわらない。①に属する新鮮な空気や日光はそ<sup>ろ</sup>って人間にとって生存上の最大・最高の有用物であるのに、なぜかほん<sup>ら</sup>い労働をまったく要せず<sup>に</sup>、しかも無限にあたえられている。そうであるからこそ、さもなければ人間が生きるために全力をあげてそれらの取得のために投<sup>じ</sup>なければならなかったであろう労働を（いや、それでもなおもちろん十分には取得できないだろうが）その他の必要な多くの有用物をつくるために注<sup>ぎ</sup>こむことができたのだ。人間（だけでなく、あらゆる生物）にとって最も大事なものは天然・自然によってそのままあたえられるのであって、なんの労働をも必要としない。これが人類生存上の最大条件である。新鮮な空気や日光がこの世から失われ、これらをと<sup>り</sup>もどすために人間労働の大量が投入されなければならない生活環境が広く生じたとするならば、人類の生存は危<sup>う</sup>くなるのではな<sup>か</sup>らうか。人類の生存上もっとも大事な・不可欠なのは、人間の労働生産物ではないということ<sup>を</sup>、いや労働生産物であ<sup>っ</sup>てはな

らないということをきびしく思いしらされる。

(1) Das Kapital, Bd. I., S. 45.

いま問題となるのは労働生産物であり、しかも有用性をもつ労働生産物でなければならぬが、それは労働によってつくられるものであるとはいえ、労働だけでつくられるのではない。自然（物質的基盤）なしにはそれは成立しないが、しかし自然だけでも生まれぬ。有用物である労働生産物は自然（母）と労働（父）の合作<sup>(2)</sup>にはかならぬ。自然に働きかけ、自然を征服する人類の闘争史は、同時にまた労働生産物の有用性を高揚する人類の発展史でもあった。労働生産物が商品の形態をとらない段階では、労働生産物はたんに有用物・使用価値としてとらえられるだけのものであり、ただ“人間と自然との関係”を内包するだけのものであるが、労働生産物が交換をとおして商品となると、それはもはやたんに“人間と自然との関係”だけではなく、さらにまた経済学上いっそう重要な“人間と人間との関係”を内蔵するものとなる。“人間と人間との関係”のなかで主役を演ずるものこそが労働、しかも一般的・抽象的な人間労働——“自然と人間との関係”にふくまれる有用物をつくるものとしての具体的な有用労働とは統一されながらも対立するところの——である。労働をふくまない自然物が商品となりえない根因はここにある。天然・自然のままにある有用物が商品（世にいう“経済財”）になりえないのは、それらが労働をふくまないからであって、無限に存在する（希少性がない）からではない。

(2) 歴史的に特殊な社会関係のもとで商品となる労働生産物は人間にとって有用なもの、使用価値・使用対象でなければならぬが、その使用価値はいまや商品体としてあらわれる。商品体としてあらわれる使用価値がどのように“自然素材と労働との結合・合作”であるかをマルクスはつぎのように説明する。「上衣、亜麻布などのような使用価値、つまり商品体は、自然素材と労働との2要素の結合である。上衣、亜麻布などに注入されているすべてのそれぞれちがう有用労働の総和をとりのぞけば、あとにはいつも人間の参入なしに自然のまま存在する物質的基盤がのこる。人間はその生産においては、ただ自然がみづからするとおりにしかできない、すなわ



ち、素材の形態を変えることができるだけである。さらに、この形態変化じたいの労働においても、人間はたえず自然諸力によって支持されている。だから、労働はそれによって生産された使用価値、すなわち素材の富の唯一の源泉なのではない。ウィリアム・ペティがいうように、労働は素材の富の父であり、土地はその母である」(a. a. O., Bd. I., SS. 47-8. [傍点—原著者])。

歴史的に特殊な社会関係のもとで商品となるものは、うえにみたように、有用な、しかも“自然と労働との結合・合作”によってえられる労働生産物でなければならない。商品となるものは、自然そのままの使用価値・有用物ではなく、自然に労働を加えて人間がつくりだした使用価値でなければならないからである。ところで、労働生産物が商品となると、労働生産物は質的転換をとげることになる。まず、商品となるまえの労働生産物、いつの時代にも共通してみられる超歴史的概念としての労働生産物を取りあげてみよう。それはどの時代の人間にとってもそれぞれに有用な使用価値であろうが、ただそれだけのものである。つまり、超歴史的概念としての労働生産物は人間にとっての“たんなる使用価値”であるのにすぎない。ところが、その労働生産物が歴史的に特殊な社会関係のもとで商品の形態をとると、それはもはや“たんなる使用価値”ではなく、使用価値であるとともに価値でもあるところの“使用価値と価値との対立的統一物”に変身・発展する。商品（商品の形態をとる歴史的に特殊な社会関係のもとでの労働生産物）がたんなる労働生産物（商品の形態をとらない超歴史的概念としての労働生産物・いわゆる“たんなる物”・“もの”）からきびしく区別されなければならない理由はまさにこのなかにある。超歴史的概念としての労働生産物は使用価値ではあっても価値ではない（価値をふくまない、投ぜられた労働は価値の形態をとらない）のに、商品の形態をとる労働生産物は使用価値であるとともに価値でもある、ということのなかに。

商品が、一面では使用価値であると同時に、他面では価値でもあるということは、商品がそれじたい矛盾の統一物であることをしめしている。両者の対立的統一は、商品を生産する“労働の2重性”にかかわるマルクス経済学の1核

心をなすもので、商品・貨幣・資本のマルクスの概念規定を把握するうえでの最大焦点のひとつとなるものである。

商品は、まずそれが使用価値であるということから説かれる。というのは、商品にとって使用価値であることは価値であることの大前提だからである。使用価値でないものは、労働生産物になりえないし、ましてや商品にはなりえないということについてはくりかえし見てきたところである。もっとも、“もの”(天然・自然物そのものやたんなる労働生産物)は使用価値であるからといって、必ずしも商品・価値であるとはいえない。だから、使用価値は価値の必要条件であって、十分条件なのではない。商品がまず使用価値の側面から解明されるわけはもうひとつある。商品の使用価値的側面＝商品体は感覚的にも触れうる有形・無形の物質的存在であり、それぞれ人間の欲望・需要を直接・間接に満たす千差万別の有用物として身近な日常生活のうえでよく感知されているものだからである。

ところで、その使用価値の内容についてこれからすこし立ちいるまえに、いまさらながら念のためひとこと。マルクスは「ある物の有用性がその物を使用価値にする<sup>(3)</sup>」とまず規定しているところからもわかるように、商品のばあいも“商品の有用性がその商品を使用価値にする”わけで、有用性(効用)そのものを使用価値とみているのではなく、有用性をもつ商品体そのものを使用価値とみている。だから、「商品の使用価値<sup>(4)</sup>」というマルクスの表現は、うえにのべられているように、“商品の使用価値的側面＝商品体”と理解すべきであろう。

(3) つづく文章。「とはいっても、この有用性は空中に浮んでいるものではない。それは、商品体の諸属性によって制約されるのであって、商品体なしには存在しない。だから、鉄・小麦・ダイヤモンドなどのような商品体そのものがひとつの使用価値、あるいは財貨なのである」(a. a. O., Bd. I., S. 40. [傍点—原著者])。

(4) 「商品の使用価値は固有な科目である商品学(Warenkunde)に材料を提供する」(a. a. O., Bd. I., S. 40. [傍点—原著者])。

かつてはあった商品種類が今はどこにも見られなくなり、またかつては無か

った商品種類が今はどこでも見られるようになる、といったように時代の變遷、社会の歴史的推移の影響をうけて、商品の使用価値的側面＝商品体もまたたえず変容する。しかし、商品体そのものについて認識を新たにしなければならない最大のポイントは、それが人間のもつ感的作用によって把握されうる有形・無形の自然的・物質的存在物であるということである。その意味で商品の物質的存在である使用価値的側面＝商品体そのものは時代の變遷、社会的・歴史的推移をのりこえた永遠の超歴史的概念に属する。その点では、商品とはならない“有用物としての労働生産物”が歴史と社会をこえた永遠の自然的・物質的素材から成りたっているのとおなじである。そしてもうひとつ注意しなければならない大事な点は、商品の使用価値的側面＝商品体じたいにとって生産上の労働は不可欠な要因ではあるが、「商品体のこの性質（有用性）は、商品体の使用上の諸属性を獲得するために人間が労働を多く要したか少し要したかにかか<sup>(5)</sup>るものではない」ということである。商品体を取得するために投げられる労働の大小で、商品体にふくまれる有用性の大小がきまるものでないということは、労働をまったく要しない天然・自然物そのままのもの（労働生産物ではないもの）がもちうる最高・絶大な有用性をみてもよくわかる。

(5) a. a. O., Bd. I., S. 40.

商品はなによりもまず使用価値でなければならないが、そのことは商品のもち手（生産者・所有者）にとってではなく、交換をとおしてそれを入手し使う他人にとってである。したがって、商品は「他人のための使用価値、すなわち社会的使用価値」<sup>(6)</sup>でなければならない。経済学の研究対象となる商品は、生産者の手中にあるあいだの商品ではなく、交換をとおして他人の手にわたってゆく商品である。使用価値の研究においてもそうである。こうして使用価値の問題は、交換をとおして相互に譲渡され・相互に入手する商品間との関係へとすすむことになる。A商品はB, C, D……などの諸商品と交換される。A商品は、それじたいひとつの使用価値であるが、同時にまた交換されるB, C, D……な

どの諸商品・それぞれ相異なる使用価値でもある。A商品と交換されるB, C, D……などの諸商品・いろいろな使用価値・使用対象がA商品の“交換価値”<sup>(7)</sup>とよばれるものである。交換価値は、A商品とB, C, D……などの諸商品との相等しい比例関係をしめすものであるが、相等しい関係は使用価値においてはなく、使用価値とは本質的にまったくちがうものにおいてでなければならない。A商品・米(一定量の—以下おなじ)はたえずくりかえされる交換において(発達した商品社会ではあとに現われる貨幣形態をとおして)B商品・肥料, C商品・農機具, D商品・衣服などの諸量との等置関係におかれるが、その等置関係の基礎には交換される両商品に共通するある等質的なもの(量的にだけ区別されるところのもの)がなければならない。なぜかといえば、使用価値は商品体が異なればそれぞれちがうものだからである。諸商品は使用価値においてはあい異なり(もっとも、あい異なるだけでは交換されないのだが)、価値においてはあい等しいからこそ交換されるものである。そこで、諸商品がたがいに交換される一根據に、諸商品の“等質関係”としての価値関係が存在しなければならないことを、明らかにすることが主要課題となる。これについて、マルクスは独特な鋭い分析をおこなっている。ところで、マルクスは使用価値と対立する価値を説くさいに、その現象形態である交換価値から分析をはじめ。なぜか。交換価値は1商品との交換によって取得される他の諸商品体・使用価値であって、1商品の固有な使用対象とおなじく自然的・物質的に感知されるものだからである。分析は具体から抽象へ、現象から本質へ、そして総合は抽象から具体へ、本質から現象へ(後方への旅)<sup>(8)</sup>。物質的・具体的・感性的である点では使用価値とならぶ交換価値をマルクスはまずとりあげ、そこから一転、この現象形態としての交換価値の奥底にひそむ本質としての価値への抽象・探索過程をすすめる。つづく総合・具体化過程において交換価値にかえるのだが、価値形態(または交換価値)の名で知られるマルクス経済学の難解な核心の一角は、使用価値・交換価値を分析するスタート・ポイントでいち早く、いとも簡略に解き明かされている(価値も、対立的な使用価値→交換価値をとおしてつかめる)ともいえよう。

- (6) 「商品を生産するためには、人はたんに使用価値をだけでなく、他人のための使用価値、すなわち社会的<sup>・</sup>使用<sup>・</sup>価値を生産しなければならない」(a. a. O., Bd. I., S. 45. [傍点—原著者])。なお、このあとに例のエンゲルスの注釈（「……他人の手に交換をとおして渡されるのでなければならない」という）が追加される。
- (7) 「交換価値は、まずある種類の使用価値が他の種類の使用価値と交換される量的関係・比率として、ときとところにつれて絶えず変動する関係としてあらわれる。……ある1商品、1クォーターの小麦は、たとえば……など、ひとことでいえば、他の諸商品と種々雑多<sup>・</sup>きままる<sup>・</sup>比率で交換される。だから、小麦はただひとつだけの交換価値をもつのでなく、多様な交換価値をもつのだ。……第1に、同一商品の妥当な諸交換価値はひとつの同一物 (ein Gleiches) を表現している。第2に、しかし、交換価値は一般に交換価値とは区別されるべき内実 (Gehalt, あとで価値として抽出される—飯田注) の表現様式・“現象形態” (“Erscheinungsform”) でありうるにすぎない」(a. a. O., Bd. I., SS. 40-1. [傍点—原著者])。
- (8) 「……かりに私が人口から手がけるとすれば、それは全体の混沌とした一表象 (eine chaotische Vorstellung des Ganzen) であるだろうが、より綿密な規定によって私は分析的にいよいよ簡単な諸概念にたどりつくだろう。表象された具体からますます希薄化する抽象（一般性）へ、そしてついには最も簡単な諸規定へと到達するだろう。さて、そこから再び後方への旅をふみだして最後にはふたたび人口に到達するだろう。とはいっても、こんどは全体としての混沌とした一表象としての人口にではなく、多数の規定と関係の豊富な総体 (eine reiche Totalität von vielen Bestimmungen und Beziehungen) としての人口に到達するだろう。……第1の過程では、充満した表象が抽象的な規定に発散された。第2の過程では、抽象的な諸規定は思考の過程で具体の再生産へつうずる」(Zur Kritik der politischen Ökonomie, erstes Heft, Volksausgabe besorgt v. Marx-Engels-Lenin-Institut, Moskau, SS. 235-6.)。
- (9) 「……価値形態にかんする節を除けば、本書は難解のかどで苦情をいわれるかもしれないようなものではなからう」(Das Kapital, Bd. I., Vorwort zur ersten Auflage, S. 6.)。

商品はなぜ交換されるのか、交換できるのか。商品交換の内容を規定する要因はなにか。商品はたがいにちがうものであるからこそ、そしてまたたがいに相等しいものであるからこそ交換されるし、交換されうる。では、たがいにちがうものとは？ またたがいに相等しいものとは？ 問題は、交換されるどこ

ろのたがいに違うものとしての商品間に存在するあい等しいものの“抽出”と  
その“表現”である。

A商品・米とB商品・肥料とが交換されるわけは、まずA商品・米の生産者・  
所有者はB商品・肥料（その商品体である使用価値）を必要とし、逆にB商品・肥  
料の生産者・所有者はA商品・米を必要とするからである。A商品・米とB  
商品・肥料とは、たがいにそれぞれの所有者ではない相手方にとって必要とさ  
れる使用価値・使用対象であるからこそ交換される。「上衣は上衣（まったく同  
質の一飯田注）とは交換されない、おなじ使用価値はおなじ使用価値とは交換さ  
れない<sup>(10)</sup>」。このように、商品交換の内容を規定する第1の要因は使用価値の差異  
である。しかし商品は、それぞれの商品体・使用価値を異にするというだけで  
は交換されえない。商品交換がたび重なり、繰り返されれば繰り返される  
ほど、商品は使用価値のちがいでだけでは交換されにくくなる。なぜならば、交  
換に提供される諸商品はそれぞれ自然的・物質的素材に人間の労働が加わって  
つくりだされたものであり、したがって交換される諸商品にふくまれる労働量  
がたがいに相等しくなければならないからである。こうして、諸商品の生産に  
必要な労働量の等一性が商品交換の内容を規定する第2の要因となる。多くの  
労働量でやっとできた1商品の一定量と、より少ない労働量でかんたんにできた  
他商品の一定量とが交換されるという不合理の認識は、それぞれの商品生産・  
交換がすすむにつれて、労働量無視のたんなる欲望充足にもとづく異質使用価  
値・有用物交換にとどめをさすことになる。では、その労働量の等一性とはな  
にか。諸商品にふくまれる労働が量的に比較されて多いとか少ないとか判定さ  
れうるためには、その労働は等質的なものでなければならない。ところが、種々  
の使用価値を商品として具体的に生産する労働はそれぞれ異質的なものであ  
って、けっして等質的なものではない。A商品・米をつくる労働とB商品・肥料  
をつくる労働とは一見して明らかなようにまったくちがう異質のものであり、  
したがってそれじたい量的に比較されうるものではない。たがいに比較され  
えない異質的な労働によってつくられた諸商品が、いったいどのようにして相

互にあい等しい労働量の産物として等置されうることになるのだろうか。1学説としての労働価値説の創始者といわれるアダム・スミスをはじめ、それを大きく修正しながら受けつぐリカードにおいても、労働の基礎分析のうえで大きな悩みと欠陥があった。<sup>(11)</sup> マルクスはこの悩みと欠陥を克服・解消して、労働を異質・具体と等質・抽象との“2重性” (Doppelcharakter)のなかにとらえ、“異質・具体入りのレトルト”のなかから等質・抽象を昇華・抽出した。マルクスは強調する。「商品にふくまれるこの2面性 (diese zwieschlächtige Natur) は私によってはじめて批判的に論証されたものである。この点は経済学の理解にとっての枢軸である……」<sup>(12)</sup>と。いわゆる使用価値を生産する具体的有用労働と価値を生産する抽象的人間労働との2重性・2面性がそれである。

(10) a. a. O., Bd. I., S. 46.

(11) ここでアダム・スミスやデイヴィッド・リカードの労働価値説に立ちいることはできない。ただひとつだけ。両者において、労働の質的差異と労働の質的同一とがはっきりと判別されなかったこと、したがって価値を形成する労働の等質性・一般性・抽象性の理論が確立されなかったことは、よく知られているところである。「……種類のちがう労働の各種生産物をたがいに交換するばあいには、これらの両方にたいしてある程度の手加減を加えるのが普通である」(A. Smith, *An Inquiry .....the Wealth of Nations*, Vol. I., p. 34.)。「相異なる質の労働は相異なる報酬をうける。このことは、商品の相対価値に変動をおこす原因となるものではない」(D. Ricardo, *The Principles of Political Economy and Taxation*, p. 11. *Everyman's Library*, edited by Ernest Rhys.)。

これらの引用文のなかにてくる「質のちがう労働」とは、使用価値をつくる労働のことでなく、ずっと後に登場する“労働力”(一定の発展段階でそれじたい“独特な商品”の形をとるようになるところの)のことであり、「相異なる報酬」とは相異なる労働力の価格＝賃金のことである。それは、労働と価値との基本的関係を論ずべきより抽象的な理論段階などで触れるべき問題ではなかった。

(12) *Das Kapital*, Bd. I., S. 46.

マルクスは、“労働の2重性”と銘うった第1章「商品」、第2節（「商品に表示されている労働の2重性」）にはいるまえの第1節「商品の2要因、使用価値と価値（価値の実体と価値の大いさ）」で使用価値と交換価値＝“価値の現象形態”

を説くさいに、早くも労働の2重性の解明をはじめている。ある一定量の商品がもついろいろな交換価値とのあいだの“同一物”・“共通物”・“第3者”を追究するくだりである。要点だけの抜き書きをつぎに。

「……同一商品の妥当な諸交換価値はある同一物 (ein Gleiches) をいいあらわしている」(a. a. O., Bd. I., S. 41.)。

「……2つの商品、たとえば小麦と鉄……の交換関係がどうであろうと、その関係はいつも、ある一定量の小麦がいくらかの量の鉄と等置される方程式であらわされる。……この方程式はなにを意味するのか。2つの相異なるものなかにおなじ大きさのある共通物 (ein Gemeinsames) が存在する、ということである。……だから両者は、それじたい小麦でもなく、鉄でもないある第3者に (einem Dritten) 等しい。したがって、両者のおのおのは、交換価値であるかぎり、この第3者に還元されうるものにちがいない」(a. a. O., Bd. I., S. 41.)。

「この共通物は諸商品の幾何学的・物理学的・化学的・またはその他の自然的な属性ではありえない。商品の物的な諸属性は一般にただ商品を有用なものにし、使用価値にするかぎりまで問題となるだけである。しかし他面、諸商品の交換関係を明白に特徴づけるものは、まさにそれらの使用価値からの抽象である。交換関係の内部では、ひとつの使用価値は、適正な比例にあるならば、どんな他の使用価値ともおなじものとみられる。……使用価値としては諸商品はなによりもまずそれぞれ質を異にするものであり、交換価値としては諸商品は量だけを異にしうるもの、したがって使用価値の一原子もふくんでいないものである」(a. a. O., Bd. I., SS. 41-2.)。

「……諸商品体から使用価値を度外視すると、そこになお残るものはただひとつの属性、労働生産物という属性だけである。とはいっても、労働生産物だってもうはやわれわれの手のなかでは変わっている。われわれが労働生産物の使用価値を捨象すると、われわれはまた労働生産物を使用価値にしている物的な諸成分や諸形態をも捨象することになる。それは、もはやテーブルでもなければ、家でも、糸でも、またその他の有用なものでもない。労働生産物のあらゆる感覚的な諸素質は消えている。……諸労働生産物の有用な性質とともに、それらの労働生産物のなかに表示されている諸労働の有用な性質は消える。だから、これらの労働はもはやたがいに区別されないうで、すべておなじ人間(的)労働、抽象的(・)人間労働に還元される」(a. a. O., Bd. I., S. 42.)。

「さて、われわれは諸労働生産物の残滓を考察してみよう。諸労働生産物になお残されているものは、同質の幻影的な対象性、無差別的な人間労働のひとつのたんなる凝結物、すなわちその支出形態にはかわりのない人間労働力の支出のたんなる凝結物のほかには何もない。これらの物はなおただ、それらの生産に人間労働力が支出され、人間



労働が積み重なっていることを示しているだけである。それらに共通するこの社会的実体の結晶として、それらの物は価値—商品価値（Warenwerte）である」（a. a. O., Bd. I., S. 42.）。

「諸商品の交換関係そのものにおいては、諸商品の交換価値はそれらの使用価値からまったく独立したものとして現われた。いまじっさいに諸労働生産物の使用価値が捨象されると、うゑに規定されたような諸労働生産物の価値がえられる。諸商品の交換関係あるいは交換価値に表示されている共通物は、だから、諸商品の価値である」（a. a. O., Bd. I., SS. 42-3.）。

「……ひとつの使用価値または財貨（ひとつの商品—飯田注）がひとつの価値をもっているのは、そのなかに抽象的人間労働が対象化、いいかえれば、物質化されているからだけのことである。……諸価値の実体をなす労働は、等一の人間労働であり、同一人間労働力の支出である。……“諸価値としては、すべての商品はただ凝結した労働時間の一定量であるのにすぎない”」（a. a. O., Bd. I., SS. 43-4.〔傍点—原著者〕）。

これらの引用文のなかにあらわれる“労働生産物”が、商品に転化された段階での“労働生産物”であるのはもちろんのことである。ところで、それじたい使用価値である“労働生産物”・商品体からその使用価値・使用価値的側面・使用対象＝自然的・物質的要素が捨象され、したがってまた使用価値の生産にかかわる人間の質的にいろいろと違う労働の具体性・有用性が捨象されることによって、あとに残るものとしてすべての人間労働に共通する一般性・抽象性、すなわちいわゆる抽象的人間労働（その凝結物としての価値）が分析・抽出されることになっている。いわゆる具体的有用労働と抽象的人間労働との“2重性”にかんする本論である『資本論』第1巻第1章第2節での説明のなからもうすこし抜き書きしてみよう。

「上衣は、ひとつの特定の欲望をみたすひとつの使用価値である。それをつくるためには、ある一定種類の生産的活動が必要である。この活動は、その目的、作業方法、対象、手段と成果によってきまる。労働の有用性が労働生産物の使用価値のなかに、あるいは労働の生産物がひとつの使用価値だということのなかにあらわされているばあい、この労働をかんたんに有用労働とよぶ」（a. a. O., Bd. I., S. 46.〔傍点—原著者〕）。

「上衣と亚麻布とが質的にちがう使用価値であるのとおなじく、それらの存在をもたらした諸労働も質的に区別される、——裁縫業と織物業。これらの物が質的にちがう使用価値でなく、したがって質的にちがう有用労働の生産物でないならば、それらはいっ

ばんに商品として向かい合うことはできないだろう」(a. a. O., Bd. I., S. 46.〔傍点—原著者〕)。

「……労働は、使用価値の造形者として、有用労働としては、人間のあらゆる社会形態から独立したひとつの生存条件であり、人間と自然とのあいだの資料転換(Stoffwechsel)を、したがって人間の生命を媒介するための永遠の自然必然事である」(a. a. O., Bd. I., S. 47.〔傍点—原著者〕)。

「価値としては、上衣と亜麻布とはおなじ実体の物であり、同質労働の客観的表現である。……生産的活動の規定性、したがって労働の有用的性格を度外視すれば、そこに残るものは、それが人間労働力の支出だということである。裁縫と機織とは、質的にちがう生産的活動であるとはいえ、どちらも人間の頭脳、筋肉、神経、手などの生産的支出であって、この意味ではどちらも人間労働である。それは人間労働力を支出する2つのちがう形態であるのにすぎない。もちろん、人間の労働力それじしんは、あれやこれやの形態で支出されるためには多かれ少なかれ発達していなければならない。それにしても、商品の価値は人間労働そのままを、人間労働(力)いっばんの支出をいいあらわすものである」(a. a. O., Bd. I., SS. 48-9.〔傍点—原著者〕)。

「……商品にふくまれている労働は、使用価値にかんしてはたんに質的なものなのだが、価値の大いさにかんしては量的にしかみられない。労働はすでになんの質ももたない人間労働に還元されているのだから。まえのばあいには、労働のどのようにしてとどに(das Wie und Was der Arbeit)が、そしてあとのばあいには、労働のどれだけ(ihr Wieviel)ということ、労働の時間的継続が問題となる」(a. a. O., Bd. I., S. 50.〔傍点—原著者〕)。

総括的な文章。「すべての労働は、一方では、生理学的意味での人間労働力の支出であり、等質の人間労働、あるいは抽象的人間労働のこの属性において、労働は商品価値を形成する。あらゆる労働は、他方では、特定の目的が定められた形態での人間労働力の支出であり、具体的有用労働のこの属性において、労働は使用価値を生産する」(a. a. O., Bd. I., S. 51.)。

商品の2要因である使用価値と価値をつくりだす“労働の2重性”にかんする解明は、さらにすすんだ理論的段階、すなわち貨幣が資本に転化した現代的な社会関係のもとでの「労働過程と価値増殖過程」<sup>(13)</sup>を説く第5章でもなされている。使用価値を生産する具体的有用労働の過程としての“労働過程”と価値を生産し増殖する抽象的人間労働の過程としての“価値形成・増殖過程”とが、そこでは資本主義的商品生産関係における“労働の2重性”にもとづいて分

析・解明されている。これについては、いまにも触れないことにして、資本以前の単純な商品生産関係に話をもどそう。

(13) Vgl. a. a. O., Bd. I., SS. 185-207.

あるひとつの商品を生産する過程でのある瞬間の労働はただひとつ。使用価値をつくる労働と、価値をつくる労働との2様の労働をべつべつに人間はそのときどきの瞬間におこなっているわけではない。ひとつの瞬間労働が2つの側面・角度から考察されているだけのことだ。商品のばあいには、「……なにも<sup>(14)</sup>のも使用価値でなくては、価値でありえない」し、使用価値をつくるのが同時に価値をつくることにもなるのだから。ところで、ごく大ざっぱに言って、A商品・米をつくる労働とB商品・肥料をつくる労働とは、それぞれ具体的に異質のものとして区別されながらも、同時にまた、どちらも平等・同質な抽象的人間労働としてはなにも区別されない。ふたつの労働が、異質の労働としてはそれぞれちがう使用価値としての米と肥料をつくるのに、同質の労働としては米と肥料のそれぞれに共通する価値をつくる。米の一定量と肥料の一定量とが商品として交換されるということは、米と肥料との使用価値がちがうからではあるが、たんにそれだけではなく米の一定量と肥料の一定量とにふくまれる同質・抽象的な人間労働の凝結物である価値の量があい等しいからでもある。有用労働・使用価値の異質性は自然的・物質的側面にかかわるものであり、抽象的人間労働・価値の等質性は社会的側面にかかわる。商品交換のなかにみられる異質と等質との関係、異質の等質への転換は、商品が一面では使用価値としてたがいにちがうものであるが、同時にまた他面では価値としておなじものである、ということを示している。米は米であるが、交換されるものとしては、同時にまた相手方の肥料でもあるということは、社会的分業における人間関係の多様性・雑多性のなかでの平等性・等質性をものがたる。労働をめぐる人間関係の平等性・等質性は奴隷社会においてではなく、それから完全に脱却した自由社会・商品生産社会のもとでなければならぬ<sup>(15)</sup>。人間社会の平等を基

礎としてはじめてあらゆる労働の質的差異（多色）は質的等一（単色）に約元される。多様の一元化。カラー・テレビの多様な色彩は、白黒テレビでは単色のたんなる濃淡として映る。<sup>(16)</sup>商品における質的差異の量的差異への転化は、やがて商品の貨幣への転化として登場する。

(14) a. a. O., Bd. I., S. 45.

(15) アリストテレスが、商品交換の等一性にふれながらも、価値概念を解明できなかったのは、かれの生きたギリシャ社会が「奴隷労働にもとづき、したがって人間と人間労働力の不平等を自然的基礎としていたからである」(a. a. O., Bd. I., S. 65. [傍点—原著者])とマルクスは指摘している。「……すべての労働の等質性と等質妥当性は、……人間平等の概念がすでに国民的先入観として確立するときだけに解きあかさされる。だがそれは、商品形態が労働生産物の一般的形態であるようなひとつの社会、したがってまた、商品所有者としての人間の相互関係が支配的な社会関係であるようなひとつの社会においてはじめて可能である」(a. a. O., Bd. I., S. 65. [傍点—原著者])。

(16) いわゆる“共通物”・“第三者”は社会関係的な側面にかかわるのであって、「諸商品の幾何学的・物理学的・化学的・またはその他の自然的な属性ではありえない」(a. a. O., Bd. I., S. 41.)といわれているように、質的差異の質的等一（“共通物”・“第三者”）・量的差異への転換も物質的・自然的な属性のうでのことからではない。だから、本文で例示したカラー・テレビ（多色・質差）の白黒テレビ（単色・量差）への転化は、物質的・自然的側面でのひとつの比喩にすぎないのであって、けっして事柄の真髄を突いているとはいえない。マルクスの興味ある“多角形の3角形化”の例示も自然的・幾何学的な一比喩である。「幾何学上の簡単な一例がこのことを明らかにするだろう。すべての直線形の面積をはかり、くらべるために、それらを3角形に分解する。3角形はそれじたい目にみえる形とはまったくちがう表現——その底辺と高さとの積の $\frac{1}{2}$ ——に還元される。おなじように、諸商品の諸交換価値も、それらがより多くを、またはより少しを表示している共通物に還元されることになる」(a. a. O., Bd. I., S. 41. [傍点—原著者])。

いまさら説くまでもないことだが、商品の2要素である使用価値と価値の概念規定がマルクスのばあいには、つうれいの経済学、なかでも主観学派経済学におけるそれらの概念規定とはまったくちがうものであることが以上でよくわかる。使用価値とはたんなる有用性・効用のことではなく、有用性・効用をもつ

(17)  
物体・商品体のことであり、価値とは有用性・効用の存在量にたいする人間の主観的評価ではなく、抽象的人間労働の凝結物・結晶・固まりである。使用価値は商品にとって不可欠な要因であるとはいえ、商品以前からの問題（商品形態をとる以前の労働生産物にとっても不可欠の問題）であるのにたいして、価値は商品だけに見られる固有な概念である。使用価値ではあっても価値ではないところのものは、たんなる自然物か、商品形態をとらない共同社会の労働生産物かであり、また商品生産社会のなかでも交換されない労働生産物・自家用生産物（したがって商品形態をとらないもの）である。価値が商品にとって固有な概念であるということは、商品があくまでも労働の生産物であること・でなければならぬということ、いいかえれば、商品の体内に労働がふくまれていること・ふくまなければならないということを示している。くりかえすと、人間労働なしには有用性をもつものとしての商品はわれわれの目のまえにあらわれえないということを経験することによって、われわれは同時に商品の生産上に必要な人間労働の重要性（価値の実体・本源）を知る。こうして商品の価値（いわゆる世俗的にいう“値打ち”）はけっきょく人間の労働によってあたえられるということがわかる。人間労働・かんたんにいうと労働のひとつひとつは、たとえ自然力（使用価値の形成に関与するところの畜力・重力・風力・水力・機械力など）そのものよりもほんらいどんなに低効率・微弱であろうとも、人間にとって大切な頭脳・精神力をはじめとする生理上の体力・エネルギーの動員・支出を意味する。絶大な自然力を合理的に活用するのもつまりは人間の労働である。こうした労働が商品生産上で絶対に欠かせないものであり、したがって人間の生存を維持する最大に重要な1基盤でもあることは明らかである。かりにもこの世界のあらゆる労働が完全にストップするならば、すべての生産手段・商品・ものが動かなくなり、商品が新たに生産されないどころか、生産された商品さえ入手・使用できなくなるのであって、数日にして人類は生命の危機にさらされることになる。そのような決定的意義をもつ人間労働の等質性、すなわち抽象的人間労働のなかに商品価値の実体を見究めたところに、社会経済学とし

てのマルクス経済学の本質的な基盤があるといわなければならない。だから、商品価値の大小をきめる要因も、マルクス経済学においては、他の諸学説で見られるような商品存在量と関連する人間評価の大小（希少性の原理）にもとめるのではなく、あくまでもただ商品の生産に必要なそして大事な抽象的人間労働（世俗的な表現をかりれば、すべての人間に共通するものとしての“汗とあぶら”，アダム・スミスのいわゆる“the toil and trouble”）<sup>(18)</sup>の大小にこれをもとめる。すべての商品価値を一身で表現するものとして、商品概念につづいて出現する貨幣概念が世俗的に“汗とあぶら”の結晶として実感的にうけとめられているということは、まさしくそれによって商品価値とその形態を客観的に正しく表明しえたものといえよう。

(17) この点の解明に力点をおいた文献のひとつに、安部隆一『「価値論」研究』がある。

(18) A. Smith, An Inquiry.....the Wealth of Nations, Vol. I., p. 33.

商品の価値量は商品の生産上必要な労働量によってきまるということを見るまえに、念のため労働と価値との本質的關係についてすこし。とかく世の中には、<sup>(19)</sup>“労働は価値である”，“価値は労働である”ことを主張しているのが労働価値説である、と誤って解釈しているむきがあるようだ。労働と価値とをげんみつに区別しないようではマルクス経済学の“かなめ”はつかめまい。労働は価値そのものではなく価値の実体であり、価値をつくる源泉である、いかえれば、価値は労働そのものではなく労働によってつくられるもの、商品の体内に対象化された（“死んだ”・“過去の”）労働、労働の固まり・結晶・凝結物なのである。「流動状態にある人間労働力、いかえれば人間労働は価値をつくるけれども価値ではない。それは凝結状態で、<sup>(20)</sup>対象の形態で価値となる」。労働じた<sup>(21)</sup>いは価値でもなければ、それじたい価値をもつものでもない。労働力は（商品の形態をとると）<sup>(22)</sup>価値をもつのだが……。ところで、労働は人類史のいつの時代にもみられる永遠の超歴史的なものであるが、労働が価値をつくり、価値として

結晶するのは、商品生産社会に固有な特殊歴史的事象である。労働生産物が商品の形態をとらない社会関係では、あとでまた項をあらためて説くように、労働をめぐる人と人との関係は直接的な社会関係・労働関係としてあらわれるのであって、商品関係・価値関係として物神化されるのではない。裏をかえしていえば、労働が価値（さらには価値形態）として対象化・物象化され、労働をめぐる人と人との関係が価値と価値との商品関係として物神化されるのは、私有化された労働生産物が社会的分業のなかで相互交換されるようになることによって、商品形態を一般的にとる歴史的に特殊な社会関係においてだけのことである。

(19) “労働は価値である”にくらべれば、“価値は労働である”の方がまだしも救える。

労働は人類史のいつの時代にもみられるもので、価値をつくらない・価値として凝固しない労働も存在するが、価値はかならず労働によってつくられるのであって労働そのものではないが労働からは切りはなせないものだからである。「価値は労働である。したがって剰余価値は土地ではありえない」(Das Kapital, Bd. III., S. 868.)とは、労働を力説したいあまりの絶叫型表現のようである。「価値は労働である」(“価値とは労働のことである”)とここでマルクスが強調しているのは、価値であるもの(剰余価値、その一部分としての地代)は土地の一分子もふくんでいない、ということをお願いからで、つまりは剰余価値・地代は土地から生れるものではなく、労働によってつくられるものであることを率直・端的に表現したものとおもわれる。だから、この一文は、価値と労働とをマルクスが同一視していることを証拠づけるものにはけっしてならない。

(20) a. a. O., Bd. I., S. 56.

(21) 「労働は諸価値の実体であり、内在的尺度ではあるが、それじしんなんの価値もたない」(a. a. O., Bd. I., S. 562. [傍点一原著者])。

(22) Vgl. a. a. O., Bd. I., S. 178.

商品の価値量はその商品の生産に必要な抽象的人間労働量、「社会的に必要な労働量、または……社会的に必要な労働時間<sup>(23)</sup>」によって決定される。その社会的に必要な労働時間というのは、「現存する社会的・標準的な生産諸条件と労働の熟練・強度の社会的な平均度をもって、なんらかの使用価値をつくるた

めに必要とされる労働時間<sup>(24)</sup>」のことである。ところで、その社会的に必要な労働時間を決定するものは「労働の生産力」である。労働の生産力は、それぞれの商品種類のちがいで質的に区別される様式・水準をもっている。A商品・米の生産力とB商品・肥料の生産力とは様式的にも水準的にもまったくちがう。米の生産力は農業生産様式のうえにたち、肥料の生産力は工業生産様式のうえにたつ。それぞれの作業様式・作業内容がちがうように、生産力水準の動きもあい異なる。だから、一方の生産力(水準)が上がったから、あるいは下がったからといって、他方の生産力も同じように上がったり、または下がったりするとは、必ずしもいえない。このように、労働の生産力は商品種別によって質的にあい異なる具体的有用労働に関連することがら<sup>(25)</sup>である。したがって、「労働の生産力は、いろいろな事情によって規定される、とりわけ労働者の熟練の平均度、科学とその技術的応用の発展段階、生産過程の社会的結合、生産手段の範囲と作業能力、そしてまた自然諸関係によって規定される<sup>(26)</sup>」。これらの事情によって労働の生産力がある商品において増進するということは、ある一定の労働時間内に生産されるその商品の数量(商品体としての使用価値の数量)が増大するということである。そのさい、一定時間内に投入される抽象的人間労働量、したがって生産される価値量にはなんの変化もおこらない<sup>(27)</sup>——労働量は労働時間が増減しないかぎり増減しない——のに、生産される商品量が増大することによって、それだけ単位あたりの商品にふくまれる抽象的人間労働量は減少し、その結晶としての価値も減少することになる。逆に労働の生産力が低下すれば、商品単位あたりの価値は上昇する。商品の価値は、商品の生産に投入され、そのなかに含まれている労働量に正比例し、労働の生産力に逆比例する<sup>(28)</sup>。

23 a. a. O., Bd. I., S. 44. (傍点—原著者)。

24 a. a. O., Bd. I., S. 43. これに先行する文章。「1商品の価値がその商品の生産中に支出された労働量によって決まるのだとすると、人が怠慢か不熟練であればあるほど、その商品の仕上げにますます多く時間を要するので、それだけその商品は多くの価値をもつもののように見えるかもしれない。しかし、諸価値の実体を形成する労働は等質の人間労働、同一人間労働力の支出である。商品世界の諸価値に表示



されている社会の全労働力は、無数の個人労働力から成りたっているが、それでもなお、ここではひとつの、同一の人間労働力としてとる。これらの各個人労働力がひとつの社会的な平均労働力の性格をもち、そうした社会的平均労働力として作用し、したがって1商品の生産にもただ平均的に必要な、あるいは社会的に必要な労働時間だけを要するかぎりでは、どの個人労働力も他の個人労働力と同一の人間労働力である」（傍点—原著者）。

なお、「同一の人間労働力」は「単純な労働力」であるということについて。「それ（人間労働）は、普通のだけれどもが特別な発達なしに平均して身体組織のなかにもっている単純な労働力の支出である。単純な平均労働それじたいは、国のちがいや文化時代の違いにつれてその性質を変えるのだが、現存のある社会では与えられている。複雑労働（kompliziertere Arbeit）は強められた単純労働（potenzierte einfache Arbeit）、というよりも倍加された単純労働（multiplizierte einfache Arbeit）にあたるのだから、少量の複雑労働は多量の単純労働に等しい。この還元はたえずおこなわれていることを、経験がしめしている」（a. a. O., Bd. I., S. 49.〔傍点—原著者〕）。

- 25) 「生産力が有用な具体的労働の生産力であるのはいつも当然のことであり、それは事実上ただ一定の時間内における合目的な生産的活動の作用度を規定するだけである。だから、有用労働はその生産力の上昇・低落に正比例してより豊富な生産物源泉とも、より貧弱な生産物源泉ともなる」（a. a. O., Bd. I., S. 51.〔傍点—原著者〕）。

26) a. a. O., Bd. I., S. 44.（傍点—原著者）。

- 27) 「……生産力の変化は価値に表示されている労働じたいにはぜんぜん関わらない。生産力は労働の具体的有用な形態に属するのだから、労働の具体的な有用形態が捨象されると、ただちに生産力はどうぜん労働とはもはやなにも関係しえなくなる。だから、生産力がどんなに変化しようとも、同一の労働はおなじ時間内にはいつもおなじ価値量を生む」（a. a. O., Bd. I., S. 51.〔傍点—原著者〕）。「……労働生産力の増進によって労働者を同一の労働支出で同一時間内により多く生産できるようにするところに……。たとこの不変の交換価値（価値—飯田注）がいまやより多い使用価値に表示され、したがって単位あたり商品の価値は低下しようとも、同一労働時間はまえと変わりなくおなじ価値を総生産物につけ加える」（a. a. O., Bd. I., S. 430.〔傍点—原著者〕）。

- 28) 「……生産力はどんなに変動しようとも、同一の労働はおなじ時間内にはいつもおなじ価値量を生む。ところが、生産力は同一時間内にちがう使用価値量を生産する。生産力が上がればより多くの使用価値量を、また生産力が下がればより少ない使用価値量を。労働の多産性を増進させ、したがって労働によってつくられる使用

価値の数量をふやす生産力のおなじ変化でも、それがこれらの使用価値の生産に必要な労働時間の総計を短縮するならば、これらの増加した使用価値総量の価値量を下げる。反対のばあいは反対」(a. a. O., Bd. I., S. 51. (榜点—原著者))。「一般的にいうと、労働生産力が大きければ大きいほど、ある品目の1商品を生産するのに必要な労働時間はそれだけ少なく、それだけその商品に結晶されている労働量は小さくなり、それだけその価値は少なくなる。反対に、労働の生産力が小さければ小さいほど、ある1品目の生産に必要な労働時間はそれだけ大きく、それだけその価値は大きくなる。だから、1商品の価値量は、その商品のなかに実現されている労働の量に正比例し、その労働の生産力に逆比例して変動する」(a. a. O., Bd. I., S. 45. (榜点—原著者))。

労働の生産力が増進すると、なぜ単位あたり商品の価値は逆比例的に低下するのかを、ここでいまいちど確認しておこう。労働生産力の増進によって、まえとおなじ労働時間内に生産される商品量・使用価値量(商品体としての)はまえよりも増加する。しかし、まえとおなじ労働時間内に形成される価値量はまえとおなじである。おなじ労働時間内に生産される商品量・使用価値量は増大しても価値量はなにも変わらない。商品量がかりに2倍に増加しても、その2倍の商品量にふくまれる総価値量はまえとおなじなのだから、単位あたりの商品にふくまれる価値量は半減することになる。ここに、労働生産力の増進によって単位あたりの商品価値が低下する根本的原因がある。労働生産力の増進によって商品生産量が増加し、商品量の増加が商品にたいする人々の主観的評価(appreciation “ありがたみ”)を低めるといったような主観価値説的な発想法(貨幣経済のもとでは、商品量・貨幣量対比の貨幣数量説的構想)とはぜんぜん無縁なマルクス的方法であるが、皮相的にみると両者の結論は一致しているかのようである。“労働生産力が増進すると、商品量が増加し、単位あたり商品の価値は低下する”，と。しかし、両者の概念規定・論理構造はまったくちがう。

使用価値を商品体とみる立場から使用価値と価値との関係を総括しよう。

“価値ではない使用価値”はあっても、“使用価値ではない価値”というものはない。“価値ではない使用価値”というのは、労働によってつくられたもので

はない自然物そのものをはじめとして、商品以前の労働生産物や商品生産社会のなかでも交換されない労働生産物・他人にとっての使用価値ではない自家用生産物<sup>(29)</sup>など——商品（交換される労働生産物）とはならないあらゆる“もの”——のことである。商品は使用価値（とはいっても、交換をとおして他人の有用物・使用価値となるもの、社会的使用価値）でなければ、価値であることはできない<sup>(30)</sup>。有用物をつくる<sup>(31)</sup>ため<sup>(31)</sup>でなければ人は労働しない。労働は人間にとって「正常な生活活動」であって、貴重な身体諸エネルギーの浪費は拒否されるのだからである。だから、使用価値が商品としてあるかぎり、使用価値と価値とはたえず共存する。価値は商品としての使用価値（使用対象・商品体）のなかに宿り、使用価値がなくなれば価値も消える<sup>(32)</sup>。価値が同時につくられた使用価値のなかにまず宿るほかはない理由は、使用価値は5感でつかみやすい現実の自然的・物質的存在であるのにたいして、価値は5感では捉えられない社会的人間関係の対象化・“結晶”であって、それじたいでは存立できないのだからである。

29 「ある物は価値でなくても使用価値ではありうる。人間にとってのその有用性が労働によって媒介されないばあいがそれである。空気、処女地、自然の草原、野生の樹木など。ある物は、商品ではなくても有用で、また人間労働の生産物でありうる。自分の生産物で自分じしんの欲望をみたく人は、使用価値をつくるとしても商品をつくるわけではない」(a. a. O., Bd. I., S. 45. [傍点—原著者])。なお、ついでながらひとこと。労働を要しないで存在する天然・自然の有用物などはほんらい商品ではないが、それでもなお発達した商品生産社会では擬制的に「商品」(カッコつき)の形態をとるばあいがある。価値はない(労働をふくまない)ので「価格」をもつ(貨幣と交換されることによって)「商品」の例として、“処女地”，“良心”，“名誉”などがあげられる。「それじたいぜんぜん商品ではないもの、たとえば良心、名誉などは、それらの所有者の手で貨幣めあてに売られ、またそれらの価格によって商品形態をとることができる。だから、物は価値をもたないでも形式的に価格をもつことができる。……なんの人間労働もそれに対象されていないので、なんの価値ももたない処女地の価格のような想像的価格形態もまた現実的な価値関係あるいはその派生的関係を隠蔽している」(a. a. O., Bd. I., SS. 107-8. [傍点—原著者])。

30 「……どんな物も使用対象でなければ価値であることはできない。物が無用なら、それに含まれる労働も無用であって、労働として勘定されず、したがって価値をつ

くらない」(a. a. O., Bd. I., S. 45. [傍点一原著者])。

31) Vgl. a. a. O., Bd. I., S. 52.

32) 「価値はある使用価値、ある物のなかにだけ存在する。ただ、価値が価値表章のなかにたんに象徴的に表示されるばあいを例外として。だから、使用価値がなくなれば、価値もまたなくなる」(a. a. O., Bd. I., S. 211. [傍点一原著者])。「価値は使用価値のなかに表示される。そして使用価値は価値造出の一条件である」(a. a. O., Bd. III., S. 870.)。

こうして商品が使用価値であるとともに価値でもあるということは、商品が“自然と社会”という“対立物の統一”・“矛盾の統一物”であることをしめしている。その“対立物の統一”は、商品交換をとおして内在的なものから外在的なものへと発展する。<sup>(33)</sup>A商品・米はB商品・肥料との交換関係のなかでは、米の生産者からみると、商品は米であると同時に肥料でもある(したがって、米をつくることは肥料をつくることにもなる)。肥料の一定量がこのさい一定量の米の価値を表現する形態として米の交換価値となることについては、すでにみたところである。A商品は、使用価値としては米であるが、交換価値としてはB商品・肥料である。一商品の使用価値と価値との内在的対立は、交換関係のなかではこうして米と肥料との外在的な対立へ、さらには米と貨幣との外在的対立へと発展する。この発展構想論理の基底にあるものは外ならぬ商品体=商品の自然的・物質的側面としての使用価値の概念規定であった。使用価値が商品の自然的・物質的側面=商品体であればこそ、使用価値(といっても交換される他の商品体)は対立物としての価値の表現形態=交換価値=価値形態となりうる。使用価値は価値を宿す物的存在(価値を内包する商品それじたい)であると同時に、価値を表現する物的形態・物的存在(その価値を内包する商品と交換される他の商品・商品体それじたい)でもある。そこで、商品は物質としての使用価値的観点においてはもとより、価値的視点においても物象化され、“もの”としてあらわれ、物としてとりあつかわれることになる。商品はたんなる“もの”ではないのに。

- 33) 「交換過程は、商品対貨幣への商品の2重化，ひとつの外在的対立をつくりだす。この外在的対立のなかに商品は使用価値と価値との内在的対立を表示している。外在的対立においては使用価値としての諸商品が交換価値としての貨幣と対立する」(a. a. O., Bd. I., SS. 109-110. [傍点—原著者])。

(未完) (1976. 8. 28. 稿)